

〈書評〉

政治と文学

——寺尾隆吉『フィクションと証言の間で——

現代ラテンアメリカにおける政治・社会動乱と小説創作』／

柳原孝敦『ラテンアメリカ主義のレトリック』*——

越川芳明

はじめに

エルネスト・チェ・ゲバラは、ラテンアメリカの国々が言語、生活習慣、宗教が似ているので、一国としてまとまることができると考えた。「リオ・ブラボールからマゼラン海峡まで」という、19世紀のあいだに形成されたらしいメタファーは、ラテンアメリカは一つという考え方を端的に表わしている。しかし、このメタファーには、アメリカ合衆国の帝国主義、資本主義に対抗するという意味で、政治的な含みがあった。このメタファーを使う者たちは、アメリカ合衆国とのかかわりで、ラテンアメリカを地政学的に捉えたのである。

しかし、メキシコシティ出身の在米パフォーミング・アーティスト、ギジェルモ・ゴメス＝ペーニャは「ロサンジェルスはメキシコシティの最北のバリオだ」と過激な比喩を用いることで、アメリカ合衆国の中にラテンアメリカを幻視する。昨今のアメリカ合衆国のラティーノ化を示唆するボーダーレスな考えだ。しかし、それとは逆に、メキシコシティのソナ・ロサなど、合衆国以上にハイパー消費主義に染まった地区も、ラテンアメリカには存在する。

アメリカ大陸はいま、そうしたアメリカ合衆国のラテンアメリカ化と、ラテンアメリカの米国化（グローバリゼーション）のせめぎ合いの中にあるといえる。だが、そうしたせめぎ合いは、米国が軍事的膨張主義をとる

19世紀半ばからすでに存在した。

そういうわけだから、ラテンアメリカ発の文学を考えるときに、ラテンアメリカ各国の政治や経済のみならず、北米のそれを抜きにできないのは当然のことであるが、だからといって、文学を論じるさいに、その芸術性を忘れて、文学を政治や経済の道具として扱えば、本末転倒になってしまう。ラテンアメリカ文学者に求められているのは、文学と政治との関わりについての知識だけでなく、文学表現に対する細やかな目配りでもある。

そんなことを考えさせられたのは、最近刊行された二冊のラテンアメリカ文学研究書を読んだからだ。

それらは専門書として、広範な読者を前提にしていない。逆にいえば、専門的知識を持ち合わせていない評者のような一般読者にはヘビーな内容が満載である。だが、いま述べた文学の政治性と真っ向から取り組んでいて、好感が持てる。

それは、植民地化された土地に特有の歴史的事情から、ともすれば政治の単純な切り口やスローガンにながされがちなラテンアメリカにあって、文学を論じることに自尊心と歎びを著者たちが持ち合わせていることがわかったからだ。

I 20世紀ラテンアメリカ小説の展開

まず、寺尾隆吉『フィクションと証言の間で——現代ラテンアメリカにおける政治・社会動乱と小説創作』から見ていくことにしよう。本書の章立ては、次のとおり。

序章 二十世紀ラテンアメリカにおける小説家と政治

第一章 メキシコ革命小説の盛衰

第二章 国家統合と小説創作

第三章 魔術的リアリズムと反帝国主義の文学

第四章 アウグスト・ロア・バストスとヒューマニズムの小説

第五章 コロンビアの暴力小説とガルシア・マルケスの登場

第六章 幻想文学と政治参加

結論 政治と向き合うことから生まれてくる文学

本書の特色は、次の3点である。第一に、序章と結論のタイトルが示唆するように、20世紀のラテンアメリカ小説を政治とのかかわりから捉えようとする。第二に、20世紀のラテンアメリカ小説の展開を、ルポルタージュ（歴史的証言）からフィクションへの流れであったとする仮説をたてていること。第三に、北はメキシコから南はチリ、アルゼンチンまで、ラテンアメリカを俯瞰するようなマクロ的視野と、文学作品のミクロ的な分析を特徴とする論述方法をとっていること。

とりわけ最後の点は、特筆に値する。単に論証にふさわしい作品の分析だけに終始するのではなく、マクロ的立場から個々の作品が書かれた時代の複数の国々にまたがる政治事情や出版状況、あるいは作品の発行部数など、文学外の情報に細かく目配りしているところなど、ラテンアメリカで書かれた優れた研究書の翻訳を読んでいるかのような錯覚を覚えるほど、よく調べられており、そのバランスのよさに感心した。

著者は難解な用語を使うことなく、しかも無駄や気取りを排して論を進め、適宜、先行研究を取りあげそれに批判を加えながら自説を作りあげる。それが本書を説得力のある優れた研究書にしている。この本は、日本人の読者だけにとどめておくのは惜しいほどで、外国語に翻訳しても、恥ずかしくない内容と文体を備えている。

とはいえ、たとえば、「グラフィティ」をコルタサル最高傑作と捉えるなど、個々の作品に対する評価に関して、専門家から異論が出るかもしれない。だが、あらかじめ著者を弁護しておけば、そうした結論にいたるまでに論理の破綻はない。反論や異論に対してオープンな姿勢を取っている。こうした論述方法に貫かれた本書は、人文科学のどのような分野の若手研究者にとっても、「論文の書き方」なるマニュアル書などより、よい

手本になることだろう。

ただし一つだけ注文をいわせていただければ、本書には何度か「小説場」という聞き慣れない語が出てくる。評者は、最初「小説ジャンル」という意味かと解して読み進めたが、それとも微妙にニュアンスが違うようである。だから、若干説明が必要であるように感じた。

さて、本書の内容を見ていこう。20世紀のラテンアメリカ小説を論じるにあたり、本書は議論の発端として、第一章にメキシコの革命小説をおく。マリアノ・アスエラの『虐げられし人々』(1915年)と、マルティン・ルイス・グスマンの『領袖の影』(1929年)を取りあげる。

戦場で書いた小説家アスエラと亡命先のスペインで書いたジャーナリストのグスマンに共通するのは、ルポルタージュとフィクションという二つの異なる形式を巧みに融合させたことであり、ともに自己の歴史的ヴィジョン(革命に対する悲観的なヴィジョン)を表現するために、象徴的な構図を作りあげたことであった。それは細部の象徴からはじまり、プロット全体の構造までを被う。

史実を背景として作品に取り込みながらもアスエラは、フィクション化によって自らのヴィジョンを物語として表現することが小説の本質であると考え、それを実践したのであった。そして、このようなアスエラの小説作法こそ、マルティン・ルイス・グスマンの成功を経て、一九三〇年代に革命小説の隆盛を生み出す鍵となるのである(42-43ページ)。

第二章で扱われるのは、1930年代以降の国民国家のイデオロギーを担う国民文学としての小説の誕生である。19世紀初頭にラテンアメリカの国々は、スペインから独立をはたし近代国家の建設にとりかかるが、近代国家にふさわしい「国民文学」はなかなか生まれない。

ラテンアメリカの各国では、19世紀末から1920年代頃まで、小説といえ

ば娯楽目的の軽薄なロマンスとして軽視されており、知識人からは文化的価値をほとんど認められていなかった。「特に国内の作家が書く小説などはまともに出版されることも少なく、ほとんどの場合ジャーナリズムの穴埋めと位置づけられ、毎日のニュースと同じくらい短命な娯楽として扱われていた」(71-72ページ)。

そんな中で、コロンビアの首都ボゴタの国会議員であったホセ・エウスタシオ・リベラの『渦』(1926年)の成功により、ラテンアメリカに特徴のある文学潮流が生まれる。それは一口でいえば、「地方主義小説」regionalismoともいうべきものであり、社会不正の告発を特徴にしている、エクアドルの「グアヤキル・グループ」の作家たちなどの信奉者を生んだ。

しかし、国家統合のイデオロギーを担った国民文学の誕生といえ、ベネズエラの進歩的ジャーナリスト、ロムロ・ガジェゴスの『ドニャ・バルバラ』(1926年)を挙げねばならない。都市的教養人のサントス、未開地を支配するバルバラ、未開地で身を持ち崩しているマリセラという人物の配置のなかで、サントスとマリセラの「結合」(95ページ)は、ヨーロッパ文明による未開市民の教化という政治イデオロギーをアレゴリー化し、ベネズエラの国家統合のヴィジョンを楽天的にしめすことができた。それゆえ、この作品は教育や政治の道具となり、首都の知識人のみならず、政敵の独裁者ファン・ピセンテ・ゴメスからさえも賞賛を受け、1930年代以降長期間にわたって「ベネズエラ小説家が模範とすべき作品として不動の地位を与えられる」(96ページ) ことになった。

『渦』のような社会不正を告発する立場であれ、『ドニャ・バルバラ』のように国家統合のヴィジョンを担う立場であれ、「小説を政治的イデオロギーと結びつけて社会改革の一手段とする作家たちは一九三〇年代以降ラテンアメリカ全体で急増する」(102ページ)が、それは小説ジャンルの社会的なステイタスを引きあげるというポジティブな側面がある一方、物語を安易にイデオロギーに従属させることにもなり、皮肉なことに、作品の質の低下をもたらすことになった。

社会全体を図式的に再現しようとする意図を先行させ、登場人物がある特定の社会集団・階層の代表、象徴として扱う創作が、結果として小説から生身の人間を奪うことになってしまっていたのである(103ページ)。

第三章で扱われるのは、そうしたリアリズム小説の根底にあった、西洋文明イデオロギー信奉への疑念から生まれた新しい時代のラテンアメリカ小説。それは60年代にわき起こるラテンアメリカ文学ブームの代名詞ともなる「魔術的リアリズム」の小説だ。

いま、「魔術的リアリズム」という用語は、日常の中に「驚異」が出現する文学として、幻想文学の定義と区別がつかないほど安易に使われているが、本書は「魔術的リアリズム」の代表例としてカルペンティエールとアストゥリアスを挙げ、「ラテンアメリカにおける『魔術的リアリズム』の文学とは、非合理的視点、非西欧的世界観による現実解釈を取り入れた創作により出来上がった作品群を指す」(119ページ)と明確に述べる。非合理的視点、非西欧的世界観とは、それまで周辺に追いやられていたインディオや黒人の世界観に他ならない。

「魔術的リアリズム」とは、文学的な操作にとどまらずに、きわめて政治的な動きでもあった。「西欧という規範を離れてインディオ文化や黒人文化に創作の基盤を求め始めた背景には、(中略)重要な政治社会的な問題が関わっていた。すわなち、帝国主義列強、特にアメリカ合衆国の軍事的・経済的進出である。(中略)キューバのバティスタ、グアテマラのエストラーダ・カブレラ、ベネズエラのごメスのような独裁政権は、権威主義的体制がそれまで考えられていたような、文明＝西欧 vs. 野蛮＝未開地という図式から生まれてくるわけではないことを示していた。それどころか、石油や農産物などの資源に絡む経済的利害関係から独裁制を裏で支えていたのは、文明国であるはずのアメリカ合衆国に他ならなかったので

ある」(119-120ページ)。

ハイチを舞台にしたカルペンティエールの『この世の王国』(1949年)は、黒人の世界観(ヴードゥー信仰)と、反帝国主義の政治的イデオロギーが合流する「記念碑的小説」(122ページ)であり、アストゥリアスの『グアテマラ伝奇集』(1931年)は、「現代におけるマヤの信仰体系、世界観の再現を目的として構想されたものだ」(118ページ)。

しかし、このような「魔術的リアリズム」の語り構造には、重大な矛盾があった。『この世の王国』において、黒人世界の「驚異」はヨーロッパの視点に立ってのみ可能になる。だが、ヨーロッパ的視点を取っているかぎり、「他者」としての黒人世界を内側から描くことはできず、エキゾティシズムの域を出られない。

そうした「魔術的リアリズム」の限界、西欧の合理主義によるエキゾティシズムを超える試みとして、インディヘニスモ文学がある。たとえば、ペルーのホセ・マリア・アルゲダスがいるが、ヨーロッパ系と先住民との対立軸にそって先住民の復権をめざすものの、西欧の合理主義とラテンアメリカの土着文化の二分法から抜けだせていない。

それに対して、四章で取りあげられるのが、ラテンアメリカの重要な論点と呼ぶべき「混血、融合文化」を反映する小説を書いたパラグアイのウグスト・ロア・バストスだ。ロア・バストスはスペイン語とグアラニーの二重言語性、カトリックと土着信仰の二重文化性という、パラグアイの現実に着目し、文化融合主義を打ち出す。デビュー作『人の子』(1960年)は、マルローやサルトル、カミュといったフランスのヒューマニズム文学の成果をふまえ、普遍的な人間の生き方を扱った小説だ。

ここでも本書が触れることを忘れないのは、作家ロア・バストスと祖国パラグアイの独裁政治との関係である。19世紀早々に独立を果たした後、パラグアイは独裁体制をしいたロドリゲス・デ・フランシアをはじめ、20世紀も独裁政治が連綿としてつづき、ロア・バストスは1947年にアルゼンチンへの亡命を余儀なくされる。そうした亡命生活は、のちにロドリゲ

ス・デ・フランシアを主人公にする独裁者小説『至高の余』(1974年)を生み出す。

しかし、『人の子』では、パラグアイの現実を特徴づける「異人種間・異文化間の融合」という論点を導入し、人間のあるべき姿を追求する小説をめざす。そうした「融合主義」の象徴の一つが、第一章の挿話にあらわれる音楽家ガスパールが彫ったキリスト像である。というのも、この像が、舞台となるこの町で対立していた正統派のキリスト教徒とグアラニー化した民間信仰のカトリシズムとを和解に導くからだ。

隣人との友愛によって世界の二項対立を融合していくヒーローの姿を描きながら、ロア・バストスは、グアラニー的口承性とスペイン的
文字文化の言語的融合から、読者との連帯を実現するためのディスクールの構築を目指しているのである(177ページ)。

たとえば、ミゲル・ベラの残した遺稿は三人称で書かれ、グアラニー文化の口承性を取りこんで、批評家から聖書的・叙事詩的スタイルと形容されるが、そうした「叙事詩的語りによって救い出したいのは、言葉による自己表現ができない行動的な英雄たちである」(178-179ページ)。「無名の英雄に神話的・象徴的形態を与え、彼らを集団的記憶から呼び起こす。これこそが、ロア・バストスが、文学は現実の単なる模倣ではなく、現実を『象徴的な形式に変換することである』と断言するときの意味するところなのである」(179ページ)。

第五章で扱われるのは、コロンビアの暴力小説である。1948年のボゴタ動乱は一般市民を巻き込み、10万人とも20万人ともいわれる死者を出し、テロや拷問などによる凄惨なジェノサイドをも生み出した。1949年にはララ・サントスの『忘れられし者たち』が発表され、1960年代までコロンビアの小説は暴力というテーマを中心に展開し、暴力小説はメキシコ革命小説に劣らない文学運動となった。だが、それらの暴力小説は、社会現実の

再現というリアリズム的姿勢と、小説を政治の道具とみなす点など、社会抗議小説『渦』の延長線上にあった。そんな中で、ダニエル・カイセードの『空っ風』（1953年）は、発売後2年で5万部も売れ、当時としては大ヒット作となり、多くの模倣者を生み出す。

『空っ風』は、小説としては稚拙な作品であり、歴史的資料としても十分な価値をもちえない代物であったが、逆に言えば、その流行によってかえって、社会抗議の小説の持つ限界が明確になった。短絡的な社会抗議小説としての暴力小説への反省から、小説という文学ジャンルのあり方を再検討することになったからだ。

そうした文脈から出てくるのが、ガルシア・マルケスである。ガルシア・マルケスは残酷なシーンを並べ立てるのではなく、人間のドラマこそ小説の中心に置かれるべきだと考え、『大佐に手紙は来ない』（1957年）と『悪い時』（1962年）の2作によって、新しい暴力小説を作り出した。

暴力小説としての『大佐に手紙は来ない』を特徴づけるのは、「運命論的世界観の排除と物語時間の操作」（202-203ページ）である。自然主義小説に批判的だったガルシア・マルケスは、「主人公の退役大佐を運命の力から解放すべく、社会的決定論に抗して生きるための理想主義を植えつける」（203ページ）。

一方、物語の時間としては、「客観的時間進行と大佐の心理に内部化された『心理時間』との混合によって構成され、これによって常に過去と未来の交差点に位置する小説的現在のあり方が強調される」（204ページ）。

そもそも、なぜガルシア・マルケスは政治的な暴力と向き合うにあたってルポルタージュではなく、小説形式を取ったのだろうか。著者はカルロス・フエンテスの説く「シンボリック・リアリズム」を援用しながら、小説にちりばめられた日用品（ラッパ、ブーツ、掛け時計など）に着目して、それらに込められた象徴的な意味合いを探っていく。それらの日用品は主人公の内面と結びついて、暴力の時代に生きる人々の「生の感覚」（219ページ）を伝えるのに役立っている。

たとえば、大佐の愛用のブーツや古い掛け時計は、大佐の古びた理想主義を象徴し、それへの執着は世の中の物質主義への拒絶を意味する。「大佐と彼の所持品は、共闘して世界の『物質主義』に抵抗しているのである」(220ページ)。

さらに、『悪い時』はすでに『大佐に手紙は来ない』においても見られた五感に訴えかける表現をさらに発展させ、暴力時代における人々の生をさらに体感的に表現しようとする。「ここでは、靴や時計といった日常生活に存在する具体的な物品に代わって、頭痛や歯痛などの痛み、鐘の音、腐敗臭といった人間の感じ取る現象がシンボルの役割を果たし、人々の置かれた外的状況、さらに内面世界をも明るみに出していく」(222ページ)。

最終章の「幻想文学と政治参加」で扱われるのは、フリオ・コルタサルの後期短編小説である。通常、ボルヘスやピオイ・カサレスなどと共に「ラプラタ幻想文学作家」と称されるコルタサルはもともと非政治的な作家であったが、キューバ革命以降、ピノチェト政権下のチリの人権問題を調査する国際調査団に加わり、その後もラテンアメリカの軍政批判の講演やジャーナリズム活動を繰り返す。とはいえ、党派的な活動をしたわけではなく、作家として自律的、人道主義的な立場からの政治活動であった。

難解とされるコルタサルの「幻想小説」と、反軍政・社会主義の政治活動は矛盾しない。というのも、コルタサルの「幻想小説」は絵空ごとではなく、「『現実』のままでは見えない『現実』の秘められた諸相を明らかにする」(240ページ)からだ。言い換えれば、「目に見える客観的現実のみならず、夢や想像にも豊かな現実が存在するという信念を持つコルタサルにとって、フィクションとは現実世界と空想世界の境界を破壊する手段である」(238ページ)。

著者はそのことを三つの短編、「ソレンティナーメ・アポカリプシス」と「新聞の切り抜き」と「グラフィティ」の分析によってしめす。とりわけ、「グラフィティ」は政治問題と短編創作の一致を模索してきたコルタ

サル の 頂 点 で あり、「想像力による軍事政権への抵抗のあり方をパンフレットの的な抗議文学に陥ることなく示した傑作である」(254ページ)。

落書きのような些細な遊びでも、一見政治活動とはまったく無縁な幻想的短編小説でも、抑圧的政治体制への意味ある連帯的抵抗運動になることができる、これが「グラフィティ」の執筆によってコルタサルが到達した結論である(259-260ページ)。

以上見てきたように、本書は、20世紀のラテンアメリカにおいて、革命や内戦、軍事独裁など政治と文学にかかわる6つのトピックを取りあげ、小説創作でそうした政治と向き合った作家たちを分析している。ルポルタージュに傾きがちな社会主義的リアリズム文学からルポルタージュとフィクションの融合した小説、さらにはフィクション性のつよい作品まで、多種多様であることが実例を挙げて丁寧にしめされ、どのようなスタイルをとっていても、ラテンアメリカの作家たちが同時代の政治的・社会的状況と結びついてきたということが語られている。その上、政治と向き合ったときに、どのような文学作品が一番優れているのか、自己の文学観をしめすことを忘れていない。

本書の著者は、結論で銜いなくこう述べている。

想像力は反抗的であり、社会を変える力もちうる、したがって文学作品は社会改革に寄与することができる、これは確かに魅力的な主張であろう。だがその可能性を持ちうるのは現実社会をめぐる作者と読者の想像力が結合する作品のみである(270ページ)。

II ラテンアメリカ主義の生成と変化

次に、柳原孝敦『ラテンアメリカ主義のレトリック』を見ていこう。目次は次のとおり。

プロローグ 「共通の場所」をめぐって

第一部 概論

第1章 ルベン・ダリーオの災禍——ラテンアメリカ主義のレトリック

第二部 十九世紀末の諸問題とラテンアメリカ主義

第2章 とまどう放蕩息子——モデルニスモのモラルとラテンアメリカ主義

第3章 街灯、吊り橋、鉄塔——ホセ・マルティ、文化概念の生産

第4章 希望の行方——マルティからロドヘ

第三部 一般化と変節の二十世紀

第5章 メキシコのウェルギリウス／ウェルギリウスのメキシコ——アルフォンソ・レイエスの位置

エピローグ レイエスの息子たち

本書の特徴は、次の4点である。第一に、ラテンアメリカは一つの文化的なまとまりを持つという考えを「ラテンアメリカ主義」の言説と呼び、19世紀から20世紀後半にいたるまで、その言説の生成現場をつかまえようとする。第二に、ラテンアメリカ主義の言説は複数あり、そのレトリックには差異があるという仮説をたてていること。第三に、日本のラテンアメリカ文学者の自覚からこの研究書が書かれているということ。第四に、論述方法として、いわば「ラテンアメリカ主義」を主人公とした、さまざまな逸話を積みかさね、それを物語作者のように語るナレーションと、デリダ風の脱構築的なレトリックとが混交したハイブリッド文体が採用されていること。

とりわけ、最後の2点は特筆に値する。忘れてならないのは、他のラテンアメリカ研究者（政治や経済の専門家）に対して文学者の側から提言を行なうという著者の自覚が本書の隠れた魅力となっていることだ。

本書の半分の分量にあたるものは、もともと日本ラテンアメリカ学会で口頭発表されたもので、著者は学会の文学者以外のメンバーに向かって、文学の陣地から論をはることを義務づけられてきたという。

地域研究者に対してであろうがそうでなかろうが、いささかなりとも文学史の、または言説の歴史の意識を持った者ならば、特定のテキストや発話を前にしたときに、どこまでが「共通の場所」すなわち紋切り型でありどこからがそれを逸脱しているのかを画定しようとする意識を抱かざるを得ない。平たく言えば、何がありきたりで何が面白いのか弁別することなしに、手放しで共感したり感動したりはできないということだ（28ページ）。

だからこそ、本書はその内容だけでなく、文体においても著者の自覚を反映したものにならざるを得ない。先ほど触れたハイブリッド文体は、専門書としては、挑戦的な試みというしかなく賞賛に値する。だが、残念ながら、その試みが成功しているとはいいがたい。

二つだけ例を挙げよう。決定や断定を先延ばしする脱構築的な姿勢ゆえに、ある逸話の中でなかなか著者の主張が見えてこないというのは当然だとしても、それに比して、個々の文の末尾には不必要と思える、断定調の「だ」や「のだ」や「のである」が連続して使われている。そのことで、むしろ、結論にいたる記述の部分に力点が置かれ、読者にフラストレーションを与える論理展開になってしまっている。だから、主語として使われているレトリカルな「私たち」が生きてこない。

もう一つ気になったのは長い引用の多さである。確かに、作家の生の言葉は魅力であり、ラテンアメリカ文学の専門家でない読者にとっては、ルベン・ダリオの詩をはじめ、長い引用文から多くを教えられた。だが、専門家を対象にした研究書において、長い引用文が頻出すると、いち早く著者の主張をつかみとりたい読者には、苛立ちをもたらしかねない。諸刃の

剣であることを自覚すべきではないだろうか。

さて、本書の内容について、順を追ってみていくことにしよう。まず、プロローグは本書の目的を説く。ラテンアメリカの知識人たちは、ニューヨークに対して「愛の不在」を嘆くという「紋切り型の論法」を使ってきた。そうした反ニューヨーク／反アメリカ合衆国の論法に支えられたラテンアメリカ主義の言説を「十九世紀以降のさまざまなテキストに確認し、それらのテキストが作り出している『共通の場所』の範囲、輪郭とその生成の様子を叙述しようというのが、本書のねらいである」(18ページ)。

ラテンアメリカ主義の言説には、「意志の力」や「愛」が自分たちの側に存在すること、ラテンアメリカの全人民が一つの国民であること、その論拠としてラテンアメリカが統一した形で独立すべきだと説いたシモン・ボリーバルの思想が参照されることなどが、その特徴として挙げられる。

しかし、ラテンアメリカ主義は一つではない。ラテンアメリカは一つだという考えがある一方で、ラテンアメリカはクリオーリョ人種からなるとする、^{クレオール}複数性を説く言説が存在する。

そうしたラテンアメリカ主義の言説のさまざまなレトリックの分析を通して、著者は何を成し遂げたいのか。さきほど触れた文学者としての著者の自覚が具体的に表明されている。

私たちの観点から見たとき、たとえ同様に囚われているように見えても、チャベスのラテンアメリカ主義は、カルペンティエールのテキストに比して、あまりにも貧しい。言葉の可能な限りのパフォーマンスを引き出す作業としての文学作品を前にすると、大衆に訴える政治家の演説は紋切り型の域を出ない。そのことを指摘することも、地域研究と協働する文学研究者の役目であろうと私たちは自認する(28ページ)。

第一部は、19世紀から20世紀初頭までのタイムスパンのなかで、ラテン

アメリカ主義の言説の生成過程をたどる。ラテンアメリカ主義の言説は、アメリカ合衆国とラテンアメリカとの関係において重大な事件があるたびに繰り返し現われた。ニカラグアのウォーカー政権の樹立（1856年）、パンアメリカ会議（1889年）、米西戦争（1898年）、パナマ運河建設（1903年）など、合衆国の帝国主義的膨張主義が現われるたび、ラテンアメリカの国々の団結や統一が唱えられた。

たとえば、ニカラグアの詩人、ルベン・ダリーオは『生命と希望の歌』（1905年）の中の「ローズヴェルトへ」という詩の中で、「経済大国アメリカ合衆国」対「文化的・精神的に優れたイスマノアメリカまたはラテンアメリカ」という二項対立の図式を用いた。

しかし、それはダリーオの専売特許というより、時代の支配的なイデオロギーであり、「明らかにホセ・エンリケ・ロドー（1871-1917）の『アリエル』（1900年）から受け継いだものである」（38ページ）。

反合衆国、汎ラテンアメリカを主張するイデオロギーをロドーの『アリエル』にならってアリエル主義と呼ぶことができるならば、それはコロンビアの作家、ホセ・マリア・トーレス＝カイセード（1830-1889）に起源をもとめることができる。というのも、「トーレス＝カイセードは『ラテンアメリカ』という呼称の採用を提唱しながら、アメリカ合衆国の力任せの対外政策に対するにイスマノアメリカの優れた文化を基礎とした統一で応じるべきだと説いた人物である」（41ページ）からだ。

トーレス＝カイセードのラテンアメリカ主義を育んだのは、人種（民族）論（的文明論）と、二つのアメリカ論を特徴とするフランスの思潮であった。つまり、ロマン／ゲルマンの人種（民族）の二項対立と、ヘーゲルやトクヴィルらに取りあげられた北米／南米の対比という考えに影響を受けていた。

とはいえ、19世紀半ばまで「アメリカ合衆国は脅威として認識されておらず、かつての宗主国スペインに対する警戒心が勝っていた」が、米国人ウィリアム・ウォーカーのニカラグアでの政権奪取により「トーレス＝カ

イセードはこれを海賊行為と呼んで非難し、独立の闘士にしてスペイン系のアメリカの統一を夢見たシモン・ボリーバルを喚起しながら、イSPANIAアメリカの団結を唱えたのだった」(46ページ)。

ラテンアメリカ主義はアメリカ合衆国の膨張主義に対する対抗言説であるが、これに似たものは、敵対するスペインへの独立期の叫びである。たとえば、メキシコ独立革命の口火を切ったイダルゴ神父の叫びは、「植民地状況から宗主国への対抗イデオロギーとして立ち上がる典型的なナショナリズムの言説」(51ページ)ということができ、「一つの国民による唯一の祖国」を夢見るという意味で、ラテンアメリカ主義もナショナリズムと類似しているといえる。

その一方で、もはや敵はスペインではなく、そこがかつてのナショナリズムとは違う。ラテンアメリカ主義は、すでに大小さまざまな国家として成立したあとで、ラテンアメリカの一つの国民を作っていこうとするものであり、「既に存在しているだろう各国のナショナリズムの上に乗るものであったり、それに解体、再編を強いるものであった」(54ページ)。

トーレス＝カイセードのラテンアメリカ主義は、敵をスペインではなくアメリカ合衆国であると見なしたという意味で早すぎた。それが時宜を得るのは、1889年のワシントンでの第一回パンアメリカ会議においてである。そのとき、アメリカ合衆国が敵であるとの意識がめばえ、ニューヨークから会議にかけつけたホセ・マルティは、新聞記事の中で、「スペインの専制から解放を成し遂げたスペイン系アメリカは〔略——著者〕いまや第二の独立を宣言すべきときを迎えた」(66ページ)と、訴えた。

合衆国を敵でありながらモデルにするという意味で、ラテンアメリカ主義の言説は、つねに両義性を帯びる。ロドーは「北マニア」*nordomanía* という用語を使い、マルティは「ヤンキーマニア」*yanquimanía* という言葉を使った(77ページ)。

パンアメリカ会議で、ラテンアメリカ諸国は、拡大型ナショナリズムを有するアメリカ合衆国をモデルにしたが、二院制という、合衆国の諸州の

統一の核となる制度を自らの統一のために取ることをためらった。そのため、ラテンアメリカ諸国の統一はならなかった。「ラテンアメリカ諸国統一のためというより、合衆国への諸国（州）併合のための制度として、それ〔二院制——引用者〕は警戒され、拒絶された」ためであった（76-77ページ）。

ルベン・ダリーオの詩は、「他のどのラテンアメリカ主義の発露たるテキストに比しても、文学的価値に秀でている」（78ページ）。「巧みな比喩配置でほとんどアレゴリカルなまでにわかりやすい勢力図を描いている」（78ページ）からだ。

本書は再度ダリーオの「ローズヴェルトへ」という詩を取りあげ、比喩形象を詳しく分析する。「狩人」Cazadorは、「侵入者」の比喩として用いられるが、それはアメリカ合衆国の隠喩、ローズヴェルトの換喩として機能し、さらに、のちの行で、狩人自身が猛禽に喩えられ、狩人であり獲物であるという、合衆国／ローズヴェルトの両義性が示唆される。

この詩に先立つ1903年にローズヴェルトによるパナマの分離・独立、運河の建設が当然詩人の念頭にあり、ダリーオの合衆国批判は、「当時の反米感情を後ろ盾に盛り上がったアリエル主義の流れを汲む」（123ページ）ものだった。

トーレス＝カイセードからマルティまでの間に形成された、「リオ・ブラボールからマゼラン海峡まで」や「リオ・グランデからフエゴ島まで」といった、直接的でわかりやすい地理表象に比して、ダリーオはラテンアメリカを隠喩／換喩の次元に変換する。さらに、ネツァワルコヨトル、インカなど、ラテンアメリカの英雄の固有名を列挙することで、歴史表象を導入する。そのため、ダリーオの詩は表象の技術のみならず、歴史の導入という意味でも洗練されたテキストといえる。それは国民の語りとしてのラテンアメリカ主義を完成したものであった。しかし、そうした「文学」としての勝利は、政治としての敗北を表していた。というのも、ダリーオのテキストは、「スペイン系アメリカがそこにいるのだ」という現状を「記

述」したものにすぎず、「具体的な実践を要求する要素がない」(85ページ) からだった。

しかし、著者は問う。洗練されたラテンアメリカ主義は、政治において敗北したままで消滅してしまったのだろうか？ と。その疑問に対して、楽観主義にも悲観主義に与しないメタ批評の立場から、やや曖昧な予測が提示される。「NAFTA (北米自由貿易協定) や MERCOSUR (南米南部共同市場) といった市場のブロック化が進んだ後に、再び古い物語が立ち上がり、ラテンアメリカの国民としての統一が唱えられないとも限らない」(96ページ) と。

第二部で扱われるのは、19世紀末のラテンアメリカ主義の展開である。モデルニスモの領袖とされたダリーオの作品「青い鳥」は、かれの出自であるブルジョワを否定して、精神のダンディズムを気取ったボヘミアンを描いていた。

ダリーオはボヘミア的な立場から合衆国批判をおこなった。ダリーオは「キャリバンたち (アメリカ人) の理想は証券取引所と工場の中」と歌って、大衆消費社会に抵抗して自らのアイデンティティを築き上げるボヘミアンの視点を打ち出す。「敵は金持ちで強力だろうが、我々には気高き精神と文化がある、という論法だ」(131ページ) が、それではラテンアメリカ主義は、経済的次元において自らの敗北を宣言していることになってしまう。

一方、ホセ・マルティのラテンアメリカ主義のレトリックを成り立たせているのはノスタルジーという、失われたものを見るヴィジョンである。メキシコにあって、パリの失われた美德として芸術の永遠性を見いだしたマルティは、ニューヨークにあって、ラテンアメリカの文化を発見する。ブルックリン橋を「鋼のハイフン」と物質表象してテクノロジーの街を讀えながら、その一方で、ラテンアメリカを「愛や栄光」や「理想」といった対立項で捉える。「今・ここにはないものを求めるという」ノスタルジーの方法によって、ラテンアメリカの「文化」や「精神」が産出される。

しかし、マルティの有名な論文「我らがアメリカ」の特徴は、両面批判である。批判しているのはアメリカ合衆国だけでなく、外来思想（ヨーロッパの実証主義）に囚われたラテンアメリカの知識人でもあるからだ。それは「内なる虎」と「外なる虎」という比喻で表現され、ときに官製のナショナリズムを批判する点で、インディヘニスモと軌を一にする。

第三部では、20世紀に入って、メキシコの教育大臣のホセ・バスコンセロス、メキシコほかの大学で教鞭をとったペドロ・エンリケス＝ウレーニャ、外交官であり、コレヒオ・デ・メヒコの設立に尽力したアルフォンソ・レイェスが取りあげられる。

ホセ・エンリケ・ロドーの『アリエル』は、ホセ・マルティとルベン・ダリーオという二人の先駆者に多くを負いながら、希望としてのラテンアメリカ主義を伝達するその姿勢に特徴があったが、そうしたロドーの精神はかれら青年文芸協会（アテネオ）のメンバーによって受け継がれる。それがかれらを「アリエル主義者」と称するゆえんである。

バスコンセロスは『宇宙的人種』（1925年）の「混血」の章において、メキシコに見られるような混血を押し進めていけば、やがて「宇宙的人種」とも言うべき「第五の人種」が出現し、それが世界に冠たる存在になるだろう、とラテンアメリカを楽天的に称揚した。

一方、ドミニカ共和国出身のエンリケス＝ウレーニャは、1922年のアルゼンチンのラプラタ大学での講演で、「精神のナショナリズム」を説く。それは崇高なる精神を唱えるハイカルチャー中心のラテンアメリカ主義に対して、『『焼き物のカップと詩』のナショナリズム』（215ページ）に目を向け、伝統工芸などの土着的な技術（ポピュラー・カルチャー）に顕在するラテンアメリカ的なものを拾い上げることであった。

1930年に、親合衆国的なメキシコ大統領オルティス＝ルビオが「ウェルギリウスの生誕二千年」を祝う行事を敢行し、皮肉にも、ラテンアメリカ主義は「ヤンキー帝国主義」の共謀者によって取り込まれ、標榜されることになる。

このとき、アルゼンチン在住の外交官であったレイェスは「ウェルギリウスをめぐる」という講演の中で、ナショナリズムが人種論的な決定論を取り入れペシミズムのほうへ流れることを批判し、ラテンアメリカ主義を対象化する立場にいた。「イデオロギーを表明するのではなく、メタ・イデオロギー的な立場からそれを論じ」(251ページ)、ラテンアメリカ主義の脱構築をはかった。

エピソードの「レイェスの息子たち」で扱われるのは、メキシコのカルロス・フエンテス、オクタビオ・パス、チリのホセ・ドノソである。

まず、かれら若手文学者たちの育成者としてのレイェスの実績が紹介される。レイェスは文学者として「文学の科学」と題された集中講義や、その講義に基づいて書かれた本『境界画定』(1944年)の出版を行なうが、「教育者」としては、亡命スペイン人たちの組織、スペイン協会の会長職についたことや、そのスペイン協会がコレヒオ・デ・メヒコと名前を変えて高等教育機関になったとき、初代学長の任を引き受けたことなどに功績があった。

コレヒオ・デ・メヒコが間借りしていたのは、フォンド・デ・クルトゥーラ・エコノミカ社の建物で、コレヒオはあたかも自身の出版社のように、フォンド社を利用していた。レイェスは教育機関と出版社の両方にかかわり、後輩作家の育成にあたった。パスやフエンテスやドノソは、いずれも「レイェスから教わったことはその主張内容というよりは、もっと外形的なこと、主張の仕方、主張するという事それ自体だと、異口同音に述べている」(273ページ)。

パスやフエンテスは、一つの方向性をしめさなかったとレイェスを非難する者たちに対して、ラテンアメリカ主義を相対化するような、レイェスの脱構築的な姿勢を評価した。その姿勢ゆえに、ラテンアメリカ主義が排他的な文化ナショナリズムに陥らないで済んだと考えたからだ。

そんなレイェスに育てられた若い作家たちが1960年代の「ラテンアメリカ文学のブーム」を牽引した。「ブーム」とは、ラテンアメリカの大陸的

な一体感であり、たとえ十年あまりの短い期間であれ、文学的なラテンアメリカ主義のプロジェクトの一つの結実であったといえる。それが著者の結論である。

初めに述べたように、本書は、ともすれば反米的なスローガンにながされがちなラテンアメリカ主義のレトリックの諸相を歴史的に丁寧な追い求めながら、それが多様で、曖昧で、両義的であることを詳細に例証している。その上で、どのようなレトリックが文学的に優れているのか、自身の文学観からの確に述べている。ベネズエラのチャベス政権をはじめ、南米の9カ国でつぎつぎと社会主義的政権が誕生し、反米的な気運が高まる現在、安易なナショナリズムと一体化した単純なラテンアメリカ主義のレトリックに翻弄されないためにも、本書の持つ意義は決して少なくない。

むすびに

最後に、二つの研究書に対する所感を述べておきたい。

ラテンアメリカ文学の専門家でない評者には、個々の主張や結論の妥当性に関して反論や批評を加えられない。そのことを読者だけでなく、著者の方々にお詫びしたい。

その上で、評者にいえることは、他の外国文学の研究水準（たとえば、博士課程の「博士論文」）に比して、適切な主題の設定、多様な文学作品からの引用と分析、先行論文の検証やそれへの批判、関連する文学外の事象（歴史や政治など）への目配り、しかるべき結論（仮説）が導きだされているかどうか、などといった点で、二つの書物ははるかに優れているということだ。

評者がアメリカ文学の分野で審査にかかわったことがある博士論文や、それに基づいて出版された著作では、一人の文学者を扱う作家論タイプが圧倒的に多かった。それに比べて、これらの著書は19世紀初めから現在までをカバーする歴史的展望があるだけでなく、ポストモダン文学理論を自家薬籠中のものとしており、取りあげる作家や作品も多彩であるし、テ

クストの細部の読解も深く精緻を極めている。

ともに、中堅の学者の手になる、10年以上におよぶ研鑽の成果なので、昨今、日本の大学院の博士課程で量産されている「博論」と比較するほうが失礼かもしれない。

両著が日本のラテンアメリカ文学研究にたずさわってこられた大勢の先学のためぬ研鑽の上に築かれたものであり、ひとり著者のみの功績ではないのは論を俟たない。とはいえ、これらの研究書の登場によって、日本のラテンアメリカ文学研究は、文学好きの趣味のレベルから本格的な研究のレベルへと大きな進化を遂げたといえるのではないだろうか。若手の研究者にとって目指すべき目標がしめされたという意味で、今後、これらの先駆的な研究書のはたす役割が増すことはあっても、減ることはないだろう。

(寺尾隆吉『フィクションと証言の間で』松籟社、2007年1月刊、四六版、272+xx ページ、3800円+税/柳原孝敦『ラテンアメリカ主義のレトリック』エディマン、2007年9月刊、A5版、291+xviii ページ、2800円+税)

*人名の表記は、それぞれの著書の方式に従った。